様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０５９４

研究課題名（和文）なぜ非行集団に同一化するのか：集団内関係と集団間関係を基盤とした統合モデルの構築

研究課題名（英文）Why do certain youths join a delinquent group? An integrative perspective

研究代表者
中川　知宏（NAKAGAWA, Tomohiro）

近畿大学・社会学部・講師

研究者番号：８０４３８５５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円、（間接経費）　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、なぜ非行集団に同一化するのかという問いに対して、集団間関係（非行集団がそれ以外の一般集団から受ける差別的扱い）と集団内関係（非行集団に所属する成員同士の相互作用で得られる集団報酬）に着目した。そして、これらが非行集団への同一化を促し、集団差別から生じるネガティブな心理状態（自尊心の低下や不確実性の高揚）を緩和することができると仮定した。過去1年間に逸脱行動に関与した経験のある高校生137名を対象に分析を行った結果、差別的扱いは直接的に自尊心を低め、不確実性を高めた。一方、集団報酬は直接的に自尊心を高め、不確実性を低めたが、集団同一化はこれらを緩和しなかった。

研究成果の概要（英文）：This study hypothesized that group identification would mediate the relationship between group rewards, group discrimination and self-esteem, uncertainty. Participants were 137 high school students who committed deviant behaviors one or more times in the past year. Results showed that group discrimination were likely to decrease self-esteem and increase uncertainty directly, while group rewards are likely to increase self-esteem and decrease uncertainty directly. However, we did not found the hypothesized indirect effect. These results did not support the hypothesis.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：非行集団　集団同一化　集団差別　集団報酬

１．研究開始当初の背景

犯罪白書（2001, 2005）によると、少年院収容者の共犯率は年々増加しており、平成元年に 58.8%であったものが、平成 16 年では 66.9%まで上昇しており、収容者の約 7 割が集団非行に関与したことを示している。また、成人よりも少年の共犯率の方が高いことも示されている（犯罪白書, 2009）。これらの知見に基づくと、少年非行の特徴のひとつに「集団性」が挙げられるが、日本では集団非行に関する研究の蓄積はほとんどない。このような背景に基づき、われわれは社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1972）を基盤とした非行の集団過程モデルを構築し、非行少年と一般少年を対象に検討した。その結果、主に以下のことが示された（Nakagawa, Nakamoto, Yamanoha & Ohbuchi, 2005; 中川・仲本・山入端・大渕, 2007）。（1）非行少年と一般少年は共に集団報酬が所属集団への同一化を促す。（2）非行少年は集団同一化が反社会的次元の集団志向性を媒介し、集団非行を促進する。（3）一般少年は集団同一化が順社会的次元の集団志向性を媒介し、集団非行を抑制する。これまでの結果から、集団非行が生じる重要な要因は非行集団への同一化であることが示されており（中川ら, 2007）、非行集団への同一化に関する規定因を検討することは集団非行の予防にもつながるだろう。

２．研究の目的

そもそも非行集団に同一化するのはなぜか。非行集団に所属することによるコスト・ベネフィットの合理的視点からすると、非行集団は反社会的集団であり、合法的な社会システムから制裁を受けることはあっても、なんらの恩恵を受けるものではない。それにもかかわらず、非行集団に留まる理由のひとつとして、非行仲間との相互作用から得られる集団報酬があげられる。しかしながら、非行集団も社会集団の一形態であることを考慮すると、非行集団と他の社会集団との集団間関係にも同時に着目する必要がある。したがって、本研究の主要な目的は、集団内関係と集団間関係の双方の視点から非行集団への同一化過程を包括的に説明することである。

具体的には、本研究では、非行集団に所属する少年を対象に以下の仮説を検証した。（1）所属集団に対する差別が集団同一化を促すが、この効果は集団境界透過性（以下、透過性）によって調整されるだろう。具体的には、所属集団の仲間以外に付き合える仲間がいないと感じている（透過性が低い）少年は、集団に所属していることで差別的な扱いを受けるほど集団同一化が強くなるだろう。（2）所属集団への差別は集団同一化の中でも認知的次元を強め、これが不確実性（自分がどのような人間であるのかということに関する不明瞭さ）を低減するだろう。また、所属集団の成員から提供される集団報酬（仲間との相互作用過程で得られる心理的報酬）は情緒的次元を強め、これが少年の自尊心を高めるだろう。

３．研究の方法

インターネット調査会社を通じてデータを収集した。調査対象者は高校生 413 名であったが、その内、過去一年間に仲間と一緒に逸脱行動へ 1 回以上関与した者 137 名（男性 57 名、女性 80 名）を分析対象とした。上記のような基準を用いて対象者を選定した理由は、本研究の仮説が非行集団を対象にしており、相対的に反社会性が強いであろうと推測される対象者を選ぶ必要があったためである。

４．研究成果

(1) 回答者の属性

回答者が最も多く行動を共にしていた 3 人以上集団についての回答を求めた。

①集団のタイプ

回答者が所属していた集団タイプについてたずねたところ、学内の仲間またはグループが 98 名（71.5%）、部活（または、サークル）の仲間が 26 名（19.0%）、学外の仲間グループが 12 名（8.8%）、その他が 1 名（0.7%）であった。

②集団の構成人数

先に回答した集団の構成人数をたずねたところ、3 人（16 名, 11.7%）、4 人（18 名, 13.1%）、5 人（37 名, 27.0%）、6 人（29 名, 21.2%）、7 人（11 名, 8.0%）、8 人（9 名, 6.6%）、9 人（6 名, 6.6%）、10 人以上（9 名, 6.6%）であった。

③集団内での立場

回答者に集団内での立場を尋ねたところ、リーダー的存在と回答した者が 17 名（12.4%）、一般的なメンバーと回答した者が 116 名（84.7%）、その他が 4 名（2.9%）であった。

④集団規則

回答者に集団内で規則が存在していたかどうかをたずねたところ、あったと回答した者が 4 名（2.9%）、なかったと回答した者が 133 名（97.1%）であった。

これらの結果から、回答者が所属していた集団は主に学内のメンバーを中心とする 3~6 人程度の小集団であり、これらの集団は規則を持たない傾向にあるといえるだろう。

(2) 集団に対する差別と集団同一化

①背景

これまで非行集団への同一化は集団報酬のような集団内要因に焦点を当ててきたが、仲間からの好意や援助を受けることによって集団同一化が高まるという知見は一般集団にも共通している。そこで、非行集団への同一化を規定する要因として、非行集団とそれ以外の一般集団（同年代の仲間集団や地域住民など）との集団間関係に焦点を当てた。具体的には、非行集団に対する差別に焦点を当てた。

非行少年の中には差別的な扱いを受けている者がいるが（日本弁護士連合会, 2002）、こうした差別的な扱いはどのような結果を招くであろうか。一般的には、ある集団（または、社会的カテゴリー）に所属していることが理由で差別的な扱いを受けるのであれば、その集団と距離を置く、または離脱するという方略が取られるだろう（Tajfel & Turner, 1986）。しかしながら、Branscombe, Schmitt, & Harvey（1999）が提唱した拒絶－同一化モデル（rejection-identification model: RIM）によると、特定の集団やマイノリティに属しているという理由で差別的な扱いを受けた者は心理的ウェルビーイングを保護するために、内集団への同一化を高めることが示されている。したがって、非行集団に所属しているという理由で差別的な扱いを受けると集団同一化が高まるだろう。

しかしながら、非行集団に所属する少年は別の集団へ移行できる可能性が残されている。その可能性がどの程度であるかは個人によって大きく異なるが、ある集団成員が所属集団から他の集団へ移行することが可能であると期待できる程度のことを集団境界透過性（permeability of group boundaries: 以下、透過性）と呼ぶ（Brewer, 2003）。透過性を強く知覚している少年の場合、差別的な扱いから生じるネガティブな心理状態を他集団に移行することで回避することができる可能性があるため、非行集団への同一化が弱まるだろう。

②結果

所属集団に対する差別と透過性を独立変数、集団同一化（認知的次元と情緒的次元の 2 つから成る）を従属変数として階層的重回帰分析を実施した。

情緒的同一化を従属変数として分析を実施した結果、差別の主効果が有意であったものの、予測とは逆に所属集団を理由に差別的な扱いを受けると、集団や集団成員に対する愛着が弱まることが示された。さらに、交互作用が有意であり、下位検定を実施したところ、透過性を強く知覚している（所属集団以外に付き合える仲間がいる）場合、差別的な扱いを受けるほど情緒的な次元での同一化が弱まったが、透過性が弱い者（所属集団の中にしか付き合える仲間がいない）の間ではそうした関連が見られなかった。

次に、認知的同一化を従属変数として分析を実施した結果、透過性の主効果のみが有意であった。この結果は透過性を強く知覚する者は集団成員の一員としての自覚が強くなることを示している。

(3) 非行集団への同一化がもたらす心理的メリット

①背景

ここでは、先ほどの研究をもとに、集団内関係（集団報酬）と集団間関係（集団差別）の双方が集団同一化の異なる次元を媒介し、これらが自尊心を高め、不確実性を低減する媒介モデルを分析した。

集団報酬は仲間との相互作用過程で得られる心理的報酬であり、報酬を得る相互作用過程で仲間に対するポジティブ感情が形成されるため、集団同一化の中でも情緒的次元（仲間や非行集団に対する愛着）を促すだろう。一方、集団差別は非行集団と他の合法的社会集団との集団間葛藤を示すものであり、これは非行少年に「われわれ」と「彼ら」の感覚を明瞭にさせる。つまり、他の合法的社会集団から差別的な扱いを受けることで、「非行集団に所属している自分たち」と「差別的な扱いをする人たち」の区別が明瞭になる。したがって、集団差別は集団同一化の中でも認知的次元（集団の一員としての認識）を促すと考えられる。

また、非行集団への同一化は一般社会において望ましいことではないが、非行少年がこうした反社会的集団に同一化するのはこれによってもたらされる心理的ベネフィットがあると仮定している。実際、集団同一化の主要な機能は集団行動を促進する点にあるが、副次的な機能としてネガティブな心理状態を緩和することが知られている（Branscombe et al, 1999）。それでは、非行集団への同一化は彼らにどのような心理的ベネフィットをもたらすのであろうか。これを検討するには非行少年の心理的特徴を考慮する必要があるが、主に低自尊心（Donnellan, Trzesniewski, Robins, Moffitt, & Caspi, 2005）と自己の不確実性（河野, 1998）によって特徴づけられることが先行研究において示されている。以上の議論から、非行集団への同一化がネガティブな心理状態を緩和することを予測しているが、特に認知的同一化が自己不確実性を低減し、情緒的同一化が自尊心を高揚させると予測している。

②結果

分析の結果、自尊心を従属変数としたモデルでは、直接的に集団報酬が自尊心を高め、差別が自尊心を低めていた。また、不確実性を従属変数としたモデルでは、集団報酬が直接的に不確実性を低めた。

一方、間接効果については、集団報酬が認知的同一化を媒介して自己の不確実性を高めたが、予測していたような間接効果ではなかった。また、情緒的同一化については有意な間接効果は得られなかった。

(4) まとめ

以上の結果を総括すると、本研究で仮定していた理論モデルは支持されなかった。モデルが支持されなかった背景には、調査対象者の反社会性の低さが挙げられるだろう。モデルでは、所属集団に対する差別を変数として仮定しているが、これは反社会性が強い非行集団に特有の現象であると考えられる。特に、非行集団以外に居場所がない（透過性が低い）少年にとっては、差別によって生じるネ

ガティブな心理状態（自尊心の低下や不確実性の向上）を避けるために集団同一化を図るだろうと予測した。しかし、本研究で選定した調査対象者は過去一年間における仲間との逸脱行動関与頻度（この中には反社会性が軽微な行為も含まれる）が 1 回から 4 回までの範囲で過半数（58.4%）を占めている。これが仮説を支持しなかった一つの要因であると推測される。

以上のことから調査対象者の反社会性の程度は弱いものと推測されるが、反社会性が非常に弱い一般集団であると考えた場合、本研究で得られた結果は解釈できる箇所が多い。例えば、分析結果の一部は集団差別が情緒的同一化を低めており、この関係は透過性が高い集団においてのみ示されている。反社会性が弱い一般集団である場合、集団差別によって生じるネガティブな心理状態がさほど生じず、所属集団に同一化することでこれに対処する必要がないことをこの結果は示唆している。特に、他集団へ移行できると考えている回答者は、集団に対する差別を受けた場合、その集団から離脱することによってネガティブな心理状態を回避できたものと推測される。それゆえ、集団に対する差別が所属集団や成員への愛着を弱めたのであろう。

今後は、反社会性が強いと考えられる矯正施設に入所している少年を対象に理論モデルを再分析する必要があるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
中川知宏（NAKAGAWA, Tomohiro）
近畿大学　総合社会学部　講師
研究者番号：80438556

(2)研究分担者

(3)連携研究者